

「私の聴いた演奏会 Best 10」というタイトルで原稿を書き上げた。そもそも音楽というものに順位をつけるのには抵抗があった。ただ、好きか嫌いかは個人の嗜好なので許されると思った。読み返してみても無意識のうちに Carlos Kleiber をベストワンにしたいと思っていることに気がついた。Kleiber の演奏会は期待通りであった。彼に期待されるレベルはそれだけ高く、又それだけの演奏をしてくれたと思う。だけれど、Mozart はやはり Mozart であった。一方、予期していなかった稀有の体験をした演奏会があった。これらを、best 2 とか best 3 に落とすのには忍びない。そこで、順位をつけずに10の演奏会を回想することに変更した。私の感激した10の演奏会は殆どが1980年代に集中している。だが、ほぼこの10年間に限られてはいるが、聴いてみたかった演奏家は殆ど網羅しているように思われる。残念なのは Mravinsky を聴けなかったこと。チケットは買ってあったのだが、病気のため彼の指揮はキャンセルになり Mariss Jansons という若手指揮者が代役を務めた。なお、ここで取り上げる演奏会は classic に限ることとする。

話は少々逸れるが、家庭のオーディオ装置で音楽を聴くのと演奏会で聴くとの根本的な違いは何か屢々議論されている。私はここで、「演奏会はどのような場か」をこれまで指摘されていなかった角度から考えてみる。

演奏会に足を運ぶ聴衆は、少し普段とは違うものを着て、何かしらを期待して多かれ少なかれ心を高ぶらせている。音楽が始まろうとすると会場は静まり返るが、全くの静寂ではない。一人一人の聴衆は静かにしているつもりでも呼吸をしている。衣擦れの音もする。聴衆は、全体としてノイズ源になっている。「このノイズが実際の演奏会の快感を生む要素になっている。」という事をこの場で言いたいのである。

その根拠として1997年の Nature, Vol.385, 23 January, p.291 の news and views に “Too quiet to hear a whisper” (静かすぎてささやきが聞こえない)、“Add some noise, and many dynamic systems respond to weak signals more strongly. Some sort of threshold process was thought to be necessary for this effect, but a new model removes the restriction.” (ちょっとノイズを加えると、多くの力学的体系はその弱い信号に、より強く反応する。)との記事が載っている。これは現在 stochastic resonance と呼ばれている。一方、1960年代には、CDやTV伝送方法のための Quantized Signals の研究が進んだ。とくに noise が量子化された信号にどの

ような影響をあたえるかの研究が盛んに行われ、**dither** とよばれるノイズを人工的に加えることにより digital 信号が平滑化されることが明らかになり、また各所で応用されている。その例として、

1) Lawrence, *Picture Coding Using Pseudo-Random Noise*, IRE Tran. Inf. Theory **8**, 145 (1962).

2) Schuchman, *Dither Signals and Their Effect on Quantization Noise*, IEEE Trans. Commun. Techno. COM-**12**, 162 (1964).

3) Dykman et. al, *Noise-induced linearization*, Phys. Lett. A**193**, 61 (1994).

など多数の論文が有る。なお、私は現在の録音方式や信号処理の方法についての実態を知りませんので間違えがありましたらご指摘ください。

以上二つの事象を演奏会の場に置き換えると、聴衆によるノイズは **dither** と同一の効果を生じていると考えることができる。会場の何となく漂う微かなざわざわ感、私語やパンフレットのページをめくる音が「小さくても、耳を凝らす周囲の人にはより敏感に聞こえる」という効果があり、大きな迷惑となる反面、快感を齎す「音楽の繊細な音がよく聞こえる」という効果があるとの結論が導かれる。

嘗て、私はオーケストラの演奏会にも、オペラグラスのような小型の双眼鏡で指揮者や演奏者を観察することがあった。最近、ルックスを見なくても音楽を十分楽しめるという境地に達した。上に述べた効果により、目をつぶって聞けるのが一番と悟った。極論すると、会場に出かけるのはその場のノイズに興じるためとも考えられる。その意味で、S 席を買う必要はない、と思われる。

いよいよ本論に戻って《心を満たしてくれた 10 の演奏会》を始めよう。

Kathleen Battle, Soprano Recital, 1992/04/25, Orchard Hall

曲目は Händel: *Ombra mai fù*, *Pianogerò la sorte mia*(わが運命を嘆こう), Mozart: *Das Veilchen* (すみれ), *Un moto di gioia* (喜びに胸は震えて), List: *S'il est un charmant gazon* (美しい芝生が広がる場所), Rachmaninoff: *How fair this spot* (ここはすばらしい), R. Strauss: *An die Nacht* (夜に寄せて), etc.

あなたは、《演奏者が、始まった音楽を途中で止めて、やり直す》という状況に出会ったことは少ないと思う。私は二回あるが、そのうちの一回はなんと **Kathleen Battle** なのです。歌い始めてすぐ手を横に振りました。ピアニストは直ぐに演奏を止めました。繰り返すこと三度。出だしに、何らかの違和感を感じたのでしょう。演奏家にとってどちらかという避けたいことをしてまで、満足する音楽を聴いてもらいたいとの気持ちが伝わってきました。その美声にうっ

とり聞き惚れるうちに予定した曲はたちまち終了。アンコールは、数多くの曲を時間をかけて歌ってくれました。最後には、舞台袖に集まった人に、一人一人握手をしてくれました。何とチャーミングな方でしょう。

Kathleen Battle はラピスラズリの青。



Stuttgarter Kammer Orchester, Günter Pichter, 2012/11/07, Kioi Hall

曲目は J. S. Bach : フーガの技法、2つの violin のための協奏曲、Mozart : Eine Kleine Nacht Musik, Schönberg: Verklärte Nacht

以下はこの時の感激を或る場所に寄稿したものです。

『11月の Stuttgarter Kammer Orchester は今年一番でした。Bach のフーガの技法、2つのヴァイオリンのための協奏曲、Mozart のアイネ・クライネ・ナハトムジークそれに Schoenberg の浄夜の4曲。お目当ては Schoenberg。後者は、友達からもらったLPに Scriabin の《法悦の時》(因に、日本語で法悦の時という宗教曲のように聞こえるが、英語では The Poem of Ecstasy。)とカップリングで入っていたのを聴いたのが初めて。細かいことはさておき、次のような詩をテーマに作曲したそうです。

森の中を、男と女が歩いている。女は心配で胸がうち震えている。女は意を決して、話し始める。「私は妊っています。母としての期待を持っては

いましたが、見知らぬ男と一夜を共にしてしまいました。この子はその時の子なのです。」

暫くして男は優しく言う。「心を悩まさなくていいよ。その子は、私達の温かさで私達の子供として育てましょう。」安堵した女は男の手を握り返し接吻する。喜びに満たされて二人は、月明かりのなかを遠ざかって行く。

女の悲しみをヴァイオリンで、男の優しさはチェロで弾かれる。その間で心の揺らぎを表現するヴィオラの見事なこと。最後は長調となっておだやかに森の奥に消え行く二人。吉田秀和さんだったら、どんな言葉で語ったことだろう。演奏が終わってから、随分長い間沈黙の時間が流れた。万雷の拍手。

良い演奏の後の拍手は、多分にアンコールを期待することが多い。この時の私は違った。絶対にアンコールはやってもらいたくなかった。この余韻が何時までも続くことを願った。こんな気持ちは、初めてだった。アンコールを聴きたくなかったら外に出れば良い。そう思った。しかし、この感動を拍手で表現したかった私は、その場を立ち去ることをしなかった。ついにアンコールが始まってしまった。私の好みとは言えない Mozart のディヴェルティメント K.136。仕方ないので拍手。ついで Hayden のセレナーデ。弱音がきれい。今度は、Bach のアリア。これも良し。でも、やっぱりアンコールはなくても良かった。久しぶりの紀尾井ホール。上智大学を横に見て四谷までの道、秋風が心地よかった。

家に帰って処分しようと思っていた Schoenberg の LP レコードを、元の棚に戻した。』

Bayerisches Staatsorchester, Carlos Kleiber, 1986/05/09, Tokyo Bunka

Kaikan

ベストワンは文句なしにカルロス・クライバー。曲目は前半では、《魔弾の射手序曲》と Mozart No. 33 の交響曲（当日になって Schubert No.3 から変更された。）後半は Brahms No.2。アンコールで《こうもり序曲》。この演奏会のチケットを取るのには、苦労したこともあったが、クライバーを実際に見て聴くことが出来る喜びで、最初の一音が出るや否や幸福感に満たされ、もう死んでもよいという感覚に襲われた。このときの印象は今になっても冷めやらず、一生に一度の体験になっている。因に、この時、チケット購入は電話受付であったため、販売開始時刻前から日本舞台芸術振興会の電話番号を入力し、期をみて発信。「ただ今混み合っていますので、暫く経ってからお掛け下さい。」との応答。掛け直しを繰り返すこと 15 分。幸運にも繋がり、ようやく手に入れたチケット。その 5 分後には完売になったとの事。演奏会迄、待つのがとても

楽しみでした。

演奏会が終わると多くの感激した聴衆が演奏者通用口で待っていた。暫く時間が経って現れたのは小沢征爾。「クライバーは向こうの出口から帰ったよ。」と知らされて一同、解散となった。

**Dresden Philharmonic Orchestra, Dresden Kreuzchor, Martin Flämig,
Matthauspassion, 1988/11/09 Hitomi Memorial Hall**

吉田秀和氏の「私の好きな曲」の中で

『人間の全体を包括し、全ての人により、全ての人に向け、全ての人のためにやられる音楽、つまり一つの時代の、そして一つの民族に限定されないという意味での世界宗教に類えている場合の、世界音楽が、やっぱり、最高の音楽のような気がする。バッハには、この意味での世界の音楽が、二つある。一つでなく、二つある。その一つは《マタイ受難曲》であり、もう一つが《ロ短調ミサ曲》である。ところで、バッハの超絶的な二曲の中で、私は《マタイ受難曲》は、これまでにほんの数回しかきいたことがない。レコードでも初めから終わりまできいたのは、何度あったか。数はおぼえていないが、十回とはならないのはたしかである。私は、それで充分満足している。私は、こんなすごい曲は、一生にそう何回もきかなくてもよい、と考えている。この曲は、私を、根こそぎゆさぶる。』

『とにかく《マタイ受難曲》の感動のなかには恐ろしいものがあり、その迫真性という点からいっても、悲哀の痛烈さにはたえがたいものがある。』

と記している。

私は、十回以上この曲を演奏会で聴いている。理論物理で生計を立てている私の友人も《マタイ受難曲》の演奏会で屢々見かけることがある。わたしと同じく、痛みで涙を流して快感を感じているのであろうか。中でも最も心に刺さるのは、ペテロの悔恨（39 曲のアリア）とユダの後悔と自殺の場面（42 曲のアリア）。それぞれ第一群と第 2 群のソロヴァイオリンに心を揺さぶられる。あらゆるヴァイオリン曲の中で最も美しいと思う。かつて演奏会できいたマタイ受難曲のなかで、Flämig に一番泣かされた。

話は逸れるが、時間を遡ること約 5 年、神保町のレコード店でボーンウイリアム指揮のレコードを見つけた。当時私はマタイ受難曲の LP を 29 組持っていた。これを入手すれば 30 組の大台に乗るのであった。このとき、レコードを 30 組所有することに如何なる意味があるのかという疑念がふとよぎった。そして 30 より 29の方が美しいと感じた。意を決して買うのをやめた。その後同じ LP を見たことはない。

再び、話が逸れるが、上記の吉田秀和氏の評論を引用して気がついたことは、

「音楽をきく」と書いてあって、「聞く」でも「聴く」でもない。私の例会では初めは「シャコンヌを聴く」でした。2回目は「シャコンヌを聞く」として、それ以降は「Missa Solemnis を聞く」、「Paganini Vn. Concerto を聞く」に変えている。「聴く」と言う文字は視聴覚教室とか試聴など、知覚現象として音に集中すること要求しているように感じる。それに比べて「聞く」は曲を通して、あなたの行いは、あなたの苦しみは仏様には「見えているよ」と同様の感覚で、より精神的な宗教的な意味合いが感じられる。それに比べて「きく」は両方を含めた総括的な言葉ですね。さすが吉田秀和さん。

Gewandhaus Orchester zu Leipzig, Kurt Mazur, 1983/10/28, Beethoven:
Symp. No.3, No. 6 Seitoku Gakuen Hall

松戸で、名曲中の名曲“英雄”と“田園”を素晴らしい演奏で聴くことができた。俗に、外来オーケストラは演奏会場によって熱の入れ方が違うと噂されることもあるが、その思い込みはこの日に一掃された。

Waseda Symphony Orchestra, 2019/06/08 Keyaki Hall

Wagner: Die Meister Singer von Nürnberg, Brahms: Academic Festival Overture、Beethoven: Sym. No. 5

アマチュアオーケストラでは一二を争うと言われている早稲田大学交響楽団が我孫子に来るといので聴きに行った。開場の前から、風采の立派な紳士で一杯。まるで同窓会。昔話に花が咲くといった風情。これは「大した演奏会ではないかも？」との予期に反し、楽団員は先輩達の誇りに応えようとの思いからか、とても良い演奏、“運命”も物凄い熱演であった。最後は“都の西北”の大合唱。終演後は、団員勢揃いでお客さんのお見送り。早稲田に臙脂色はよく似合う。

Boston Symphony Orchestra, Seiji Ozawa, 1986/02/23, NHK Hall

あの頃、私の周りには、小沢征爾派と岩城宏之派がいた。小沢派はプライベートのことが取りざたされて劣勢であった。そんな時、私は Santa Fe 近くに暫く滞在する機会があった。毎週木曜日の 8 時になると TV で Boston Symphony が放送された。私の拙い英語能力でも”Take Ozawa into your life.”と言っていることが分かった。それ以来しばしばこの番組を見るようになった。帰国してから《OZAWA》というタイトルの laser disk を買った。彼の経歴と確執を良く知ることとなり一層のファンとなった。この演奏会は彼の日本凱旋公演とも言うべきものであった。曲目は R. Strauss: Also sprach Zarathustra と Brahms: Symp. No.1. この演奏会で、オーディオにお金をかけるのは無駄と改めて思っ

た。オルガンの音を自宅で再現するのは到底無理。

Virtuosi di Moscow, Vladimir Spivakov, 1983/10/04, Tchaikovsky: Serenade for Strings, Nova Hall

筑波に Nova Hall ができ、まもなくこの演奏会が行われた。NHK の技術者が設計したとのことで、前評判は上々。まわりの壁は石張りで最近の木材主体の会場とはやや異質な感触がする。曲目は Mozart: Eine Kleine Nachtmusik と Sinfonia Concertante for Violin and Viola in E-flat major そして Tchaikovsky: Serenade for Strings in C major。弦楽合奏が、えも言えない美しさ。

Lucia di Lammermoor, 1979/07/11, 08/07, The Santa Fe Opera

Santa Fe はメキシコから北上してきたスペイン人が入植して出来た町である。地名はスペイン語に由来するものが多く、Santa Fe は saint faith, Los Alamos は the poplar(ぽぷら)、目の前の山並みは Sangre de Christ (blood of Christ), Rio Grande (Big River) などなど。茶色の煉瓦を粘度で塗り固めたような街並に、ゼラニウムが飾られ、先住民の創作による、トルコ石の装飾品や民族衣装を抽象化したデザインの敷物などが店に並べられ、道端で売られている。町の中心から少し離れた一画では、絵画や、陶芸、彫像、装飾品などを制作する芸術家が集まっている。雨は少ないが、広大な地下湖水があるとのことで、水には不自由しない。上流階級のアメリカ人の憧れの土地は Florida らしいが、Santa Fe も人気がある。但し標高が 2000m もあるので歳を取ると呼吸が苦しくなると言う人もいる。町外れにある Santa Fe Opera は野外劇場で 6 月末から 8 月一杯開催される。演目は大むね 5 曲である。屋根は舞台の上を覆ってはいるが客席は覆ってはいない。雨が心配でないか尋ねると、「大丈夫、舞台が始まると止むから。」と口を揃えて応える。私が鑑賞したその日もまさにその通りになった。第一幕がなかごろにさしかかると、頭上には星が輝いていた。私は、《ランメルムーアのルチア》をきいた。Ashley Putnam のコロラトールソプラノにすっかり魅了され、終演後、同僚とサインを貰いにいった。

後になって吉田秀和氏がこの歌手を褒めている記事を読んだ。ヨーロッパのオペラに比べて認知度が高くはないが、Santa Fe Opera にも一流の歌手が出演しているようだ。

余談だが、この時、ズボンのファスナーが動きにくくなっているにもかかわらず無理して閉めたので、壊れてしまった。休憩時間にじっとしていなければならなかったのは辛かった。そしてアメリカにも「社会の窓」に相当する xyz (examine your zipper) という言葉があることを知った。

La jolie fille de perth, 2008/07/12, New National Theater

《小さな木の実》は Bizet の 《美しいパースの娘》 というオペラに出て来る曲であることを知った。LP ではこのオペラは録音されていないらしく、何時か聞いてみたいとの願いは、初台でかなえることが出来た。前に例会で話したことだが、ビゼーの曲にはどこか懐かしさがこみ上げて来るものがある。Henri Smith の歌うセレナードは正にそれであった。

後になって同名の CD を買ったが、何処か違っている。リーフレットを再読すると、「異校の類からも聴きどころを集めた上演形式を取っている」と書かれている。国立劇場のオペラも CD 化が期待される。

以上のベストテンには載せられない、大切な一曲がある。

Best 0 “！！！！！”

初めてオーケストラを聞いたあの時の忘れられない瞬間。私の特異点。

(2023-07-07)

